

境界集落の渡世

— 隅田荘真土村 —

森 栗 茂 一

- 一 はじめに
- 二 宗教集落から関所集落へ
- 三 隅田荘のなかで
- 四 膏薬と渡世商い
- 五 おわりに

論文要旨

隅田荘の東の境界であり、紀州の東端である真土は、中世社会の残存をどのように近世や近代にうけついでたのであろうか。中世の下級僧侶である聖たちが住んでいた宿と、近世の紀州藩が設営した関所集落とは街道が動いており、地理的な連続性はない。にもかかわらず、近世檀家制度が、近世「街道」集落の住民に真宗寺院を旦那寺に強要した結果、隅田の村落社会は、神社の祭礼などにおいて、真土を芸能に奉仕する村にしたてていった。かつて、これらの芸能は殿原たちが、交替で勤めていた

ものにすぎなかったものであるのだが、近世では真土だけの任務になってしまった。こうして、真土に対する不当なまなざしが、近世に成立した。もともと、聖たちの伝えた膏薬の技術は、近世の真土の人々に受け継がれた。この村の近世的特産品として生産され、とくに紀伊半島の森林開発がすすむなかで、金物行商との組み合わせで各地の伐採従事者に浸透していった。こうして、境界の村は、外の世界とつながることで、旧荘園内部に、広い農地を所有するまでの経済力をもつようになっていた。